

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

2019年の展望を考えるに当たり、昨年2018年を振り返ってみると、当初想定していたように2017年と同様のレンジ相場が継続してしまいました。

年間の値幅は10円を下回り過去最少、2017～2018年の2年間を通して値幅は14円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、年明けの1月3日に108円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドルは短期に4円以上の下落という動きが引き起こされました。

107円半ば以下では、公的年金のドル買いのうわさもあり、現在ではややドルが持ち直していますが、依然不透明な状況が続いています。

今後の相場は、米経済の成長が鈍化するのか、それに伴って米国の利上げが打ち止めとなるのか

ドル/円相場のトレード戦略

注目されることになるでしょうが、1月の米FOMCでは声明文から追加利上げのバイアスが削除されたことにより政策スタンスが大きく変わった可能性が指摘されており、当面の上値は限られたものとなりそうです。

ただし、2月の米雇用統計は好調を維持しており、早期に明確なファンダメンタルズの変化が起きる可能性は低く、また米中通商交渉の前向き妥結の期待感もあり目先ドルは底堅く推移しそうです。当面は、108円から114円程度のレンジが想定されます。

■短期展望

先週は、109円後半で寄り付き、週初に週間安値109円70銭まで下落した後、ドルは底堅い動きを続け、週末には110円後半まで値を戻しました。ただし、111円の壁は厚く、111円台を回復することはできませんでした。

今週も、ドルの堅調な動きが継続するものと思われます。世界景気減速懸念に対して日米欧の中央銀行の大規模緩和政策継続宣言の効果もあり、市場は幾分明るさを取り戻しています。

また米金利の低下にも一服感が出ており、週末には米10年債利回りが2.4%超えまで上昇して越週していることもドルの支援材料となりそうです。

したがって、今週は110円半ばから112円半ばのレンジを想定します。